週刊ポスト 2021.2.26(金)発売号

名曲カルテ

# 昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

## 第149回 和製ポップスの父・筒美京平と「大衆音楽最大のヒット」の接点

昭和41年8月、『ザ・ヒットパレード』のディレクターだったすぎやまこういちがフジテレビを退職し作曲家へと移行していた時期、ポリドール・レコード洋楽担当ディレクターだった渡辺栄吉が、すぎやまの影武者として作曲した『黄色いレモン』が発売されました。

渡辺が名前を隠したレコードは競作となり、渡辺所属のポリドールから、すぎやまの弟子の藤浩一バージョンが最初にリリースされましたが、中学生だった私が知っていたのは、そのひと月前に行なわれたビートルズ来日公演で前座を務めた望月浩盤のほうでした。

作詞を担当したのは、同じくすぎやまの元で修行していた橋本淳で、彼はすでに前年『涙のギター』(曲・すぎやまこういち、歌・紀本ヨシオ)で作詞家デビューを果たし、『黄色いレモン』の5か月前にはブルーコメッツに『青い瞳(英語盤)』の歌詞を提供しています。

『黄色いレモン』発売の前月、まだグループサウンズなどという呼称が存在していない頃、当時、寺尾聰が在籍しブルコメ以上の人気を誇っていたザ・サベージが『いつまでもいつまでも』をリリースします。

サベージは同年12月に『この手のひらに愛を』をフィーチャーしたファーストアルバムを発売、その中に前述のディレクター渡辺栄吉が作曲した『涙をふいて』(詞・橋本淳)というオリジナル曲が収録されました。そして、そこに記されていたのは「筒美京平作曲」という6文字で、おそらくこれが「筒美京平」名義での最初の楽曲だったのだと思います。

他社アーチストのために筆名を使い曲を提供、覚悟を決めた渡辺は、翌年26歳でレコード会社を退職、「筒美京平」として作曲家に転身します。青山学院ジャズバンド在籍時代の1年先輩だった橋本淳とのコンビで、以後、弘田三枝子、ヴィレッジ・シンガーズから始まる和製ポップス、GSソング等々、数々の大ヒット曲を量産、「洋楽風アレンジと日本的メロディーの融合」で私たち昭和世代を楽しませてくれた貢献度は語り尽くせません。

『恋はスバヤク』のガス・バッカス、『涙くんさよなら』のジョニー・ティロットソンなどの洋楽を担当していたディレクター時代、筒美は売れなかったときの悲哀を痛切に感じていたのでしょう。筒美が生涯「売れる曲」に固執し続けた理由とは、レコード制作の原点がサラリーマン時代の経験にあったからであり、自ら編曲にこだわったのも「売るための戦略」の武器にしたかったのだと思います。

筒美の事実上のデビュー作品、『黄色いレモン』の藤浩一盤はヒットしませんでしたが、その9年後、藤は名前を子門真人と改め、日本の大衆音楽史上最大のヒット曲を出すことになります。『およげ!たいやきくん』です。

すぎやまこういちの背中を橋本淳が追いかけ、筒美と子門が加わった『黄色いレモン』から始まる物語は、記録にも記憶にも残る大きな足跡を残し、大団円へと向かいました。

名曲に伴う思い出を多くの人と分かち合える時代に生まれた幸せを喜びつつ、不世出の天才、「昭和歌謡のモーツァルト」に感謝です。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『しあわせになろうね　私的「昭和大衆歌謡考」第4集』(グスコー出版)が好評発売中